

ヘーゲル『精神の現象学』における *dein* の意味について

——ヘーゲルの平明な理解を彼方に追いやる没論理的混乱を回避するために——

神山伸弘

要旨

ヘーゲルの『精神の現象学』を読解するに必要な語学的知見のうち、並立接続詞の *dein* の意味を十分に弁えておくことは、きわめて重要である。というのも、この意味をどうとるかによって、そのテキストの意義がまったく違った様相を帯びてくるからである。本論では、その語学的知見をまとめるとともに、若干のテキストを解釈するなかでその妥当性を吟味し、あわせて『精神の現象学』を研究する者にとって必要な解釈態度を提起する。

一 はじめに

ヘーゲルの議論は、一般に晦渋であると評されるのが常であろう。そして、その晦渋さこそがヘーゲルの「弁証法」なるものの真骨頂であるかにみなされ、そこに「深遠な」意義を見出し目を潤ませる向きもあるかと思えば、むしろそうであるがゆえに、ヘーゲルの議論の一般的通用性を否定する評価もますます頑なになっていられると思われる。こうした傾向は、代名詞によって繰り返しを避け、さらに構文的に省略の修辭を駆使用する『精神の現象学』において甚だしいといわなければならない。

『精神の現象学』においてその議論の晦渋さが文章表現上どのようなパターンで生じているのかについては、テキストの総体を相手に系統立てて整理する研究が必要だと思われる。しかし、それ以前に、実際には、研究者の側に「語学」上の問題がある、ということを描きざるをえない面もあるのである。本論で問題としようとするのは、この面のうち、denm という語の意味を理解するあり方である。

本論では、まず、denm が『精神の現象学』においてどのように分布しているかを検討し(第二節)、その解釈に必要な「語学」的知見について浅学を省みずまとめることとし(第三節)、さらにその若干のテキストにおいて実際に解釈を試みるなかで(第四節)、『精神の現象学』において denm という語が関わるテキストを解釈する際の我々の基本的な態度を明確にすることにした⁽¹⁾。

二 『精神の現象学』における denm の分布と構文的位

ヘーゲルの『精神の現象学』では、ブーアカンパ社版全集のテキスト⁽²⁾において denm が五九九件出現する⁽³⁾。その分布の実態をつかみ、後に個々別々に検討するための索引として用いるために、煩を厭わずその出現箇所を次に掲げておく。なお、出現箇所は、章ないし節ごとに区分し、直前の句読点等の記号を付して(無いときは無記)「ページ数・行数」を洋数字で示す。この際、文(Satz)——重文・複文のときは構文上の要素としての単文——の先頭にあつて定動詞の位置に影響を及ぼしていない並列接続詞(つまり、接続詞、第一文肢、定動詞以下の順で並ぶときの当該の接続詞)と位置づけられるものについては、ボールドで示し、それ以外は、イタリックで示すことにする。なお、下線を施しているものは、後に第四節において用例検討をするものである。

Vorrede ... S.11

.11:09	-13:12	.13:24	:20:02	:20:03
:20:11	:20:32	25:07 ⁽⁴⁾	.25:12	.25:23
.25:31	:27:20	:29:26	.33:15	.33:16
:35:36	:38:32	.38:34	.40:23	(40:26)
44:02 ⁽⁵⁾	44:29 ⁽⁶⁾	.45:01	.45:06	.47:09
:52:09	:53:07	.53:31	.53:33	:54:32
(55:30)	:56:05	:57:01	.64:22	.65:02
:65:14				

Einleitung ... S.68			
<u>.68:21</u>	.69:05	.69:18	.69:25 .71:05
.71:12	.71:22	.71:33	.72:22 .75:20
.75:29	.76:16	.76:35	.77:31 .78:16
.78:18			
I. Die sinnliche Gewißheit oder das Diese und das Meinen ... S.82			
.82:20	.84:33	.86:10	.87:19 <u>.88:18</u>
.88:22	.91:10	.91:16	.92:17
II. Die Wahrnehmung oder das Ding und die Täuschung ... S.93			
.93:05	.94:07	.94:36	.95:26 .97:07
.97:15	.98:12	.98:34	.100:9 .100:16
.100:36	.103:16		
III. Kraft und Verstand, Erscheinung und übersinnliche Welt ... S.107			
.107:26 (7)	.110:23	.110:29	.112:24 .113:26
(115:17	.116:11	.117:01	.117:23 .117:24
.117:33	.118:23	.118:35	.120:04 .120:20
.120:30	.122:17	.123:20	.126:12 .127:07
.127:19	.127:21	<u>.128:07</u>	.130:12 .130:32
.132:11	.132:28	.133:05	.133:09 .133:32
.136:03			
IV. Die Wahrheit der Gewißheit seiner selbst ... S.137			
.137:18	.137:29	.139:24	.140:15 .141:01
.141:03	.141:26	.142:04	.143:28 .144:01
V. Gewißheit und Wahrheit der Vernunft ... S.178			
.179:02	.179:16	.180:15	.181:32 .182:13
<u>.182:27</u>	.184:04	.184:12	.184:33
A. BEOBACHTENDE VERNUNFT ... S.185			
.186:18	.187:16	.190:08	.190:15 .191:05
.193:01	.193:34	.195:02	.197:24 .198:21
.200:16	<u>200:32</u> (8)	.201:23	.201:26 .203:17
.204:07	.205:22	.206:08	.207:25 .208:31
.209:31	.210:30	.211:13	.213:26 .214:13
.216:11	.216:24	.217:12	.217:20 .218:17
.218:32	.219:18	.219:36	.220:07 .227:33
.228:14	.230:21	.231:24	.234:33 .237:02
.237:15	.239:01	.241:31	.247:19 .247:26
.247:34	.248:02	.248:25	.249:14 .250:11

.250:15 .251:23 ⑨ .252:23 .252:25 .252:31
 .253:18 .253:29 .254:06 .254:09 .256:20
 .256:24 .257:11 .257:20 .258:04 .262:05

B. DIE VERWIRKLICHUNG DES VERNÜNFTIGEN SELBST-

BEWUSSTSEINS DURCH SICH SELBST ... S.263

.264:16 .266:33 .267:01 .267:33 .270:20
 .270:30 .271:21 .272:09 .272:24 .273:08
 .273:19 .274:18 .274:36 .275:20 .276:20
 .277:19 .277:36 .278:02 .278:05 .279:15
 .281:09 .282:14 .283:04 .284:01 .284:12
 .285:18 .285:28 .286:01 .286:06 .287:05
 .287:08 .288:07 .288:23 .288:30 .289:14
 .289:20 .290:05 .290:31 .290:34 .290:36

C. DIE INDIVIDUALITÄT, WELCHE SICH AN UND FÜR SICH

SELBST REELL IST ... S.292

.294:21 .294:22 .294:25 .297:15 .297:20
 .298:06 .298:17 .299:20 .301:21 ⑩ .301:28
 .303:15 .305:35 .307:04 .307:09 .308:07
 .311:20 .311:23 .311:24 .312:01 .312:02
 .312:04 .312:05 .312:06 .312:07 .312:10
 .312:18 .312:20 .313:26 .314:11 .314:25
 .315:27 .315:36 .317:02 .318:10 .321:16
 .322:08 .322:21 .322:24

VI. Der Geist ... S.324

.325:17

A. DER WAHRE GEIST. DIE STTLICHKEIT ... S.327

.330:04 .330:33 .332:01 .332:05 .334:22
 .337:07 .340:32 .341:05 .342:18 ⑪ .343:04
 .344:08 .345:31 .346:03 .346:05 .346:29
 .347:29 .348:16 .349:14 .350:30 .351:10
 .351:16 .353:21 .354:22 .356:30 .356:34
 .358:03 .358:22

B. DER SICH ENTFREMDETE GEIST. DIE BILDUNG ... S.359

.360:21 .365:01 .365:26 .368:20 .369:16
 .369:30 .370:14 .370:24 .371:34 .374:15
 .374:28 .376:08 .378:04 .378:17 .379:05
 .381:08 .382:30 .383:32 .384:20 .384:24
 .385:06 .387:30 .388:02 .388:10 .388:32
 .391:10 .392:12 .392:14 .395:07 .396:12
 .396:24 .397:23 .397:25 .399:01 .399:27
 .400:22 .400:32 .401:29 .403:03 .403:14
 .403:20 .404:26 .405:09 .406:11 .407:12
 .407:17 .412:35 .412:36 .413:08 .413:15
 .414:18 .414:33 .415:01 .415:35 .416:06
 .416:27 .417:14 .417:17 .417:30 .418:30
 .420:15 .420:23 .420:35 .423:16 .423:24
 .423:32 .425:05 .425:09 .425:23 .427:01
 .428:02 .428:13 .428:25 .431:28 .432:07
 .432:11 .432:20 .432:35 .433:08 .435:21

.435:30	.436:06	:436:29	437:7 ⑫	:437:16
.438:12	.440:20	.440:30		
C. DER SEINER SELBST GEWISSE GEIST. DIE MORALITÄT ...				
S.441				
.441:22	.442:07	.442:13	.442:16	:444:25
.445:06	.446:09	:446:23	:446:34	.446:36
.448:34	.449:05	:449:23	:450:15	.451:01
.451:28	452:06 ⑬	:452:22	.453:08	.453:10
.453:28	.454:18	.455:23	:455:33	:455:36
.456:07	.456:09	.456:27	.456:30	.456:32
.457:21	.457:23	.457:30	.457:33	:458:07
.458:14	.458:15	.458:27	.459:27	:460:22
.460:27	.460:34	.461:01	.461:12	:462:16
.462:27	.464:13	:468:21	.469:08	.469:21
.470:22	.472:23	.473:03	.473:22	.474:01
.474:31	.476:17	:476:29	:476:31	.477:31
.478:01	.479:15	.479:28	.480:27	.480:32
.480:34	.480:35	.481:14	.482:11	.482:27
.483:24	.483:26	.486:09	.486:27	.487:05
.487:16	.487:25	.487:29	.488:03	:488:11
.488:25	.489:08	:490:06	:490:27	.491:06
.493:30	.493:35	.494:10		
VII. Die Religion ... S.495				
.498:32	.499:08	.502:25		

A. DIE NATÜRLICHE RELIGION ... S.503				
.503:17	.504:02	.504:16	.504:21	:505:22
.507:34	.511:33			
B. DIE KUNSTRELIGION ... S.512				
.513:09	.514:01	.519:16	.520:26	.523:27
.524:20	.525:20	:526:21	.526:28	.527:05
.528:09	.529:07	.529:11	.533:28	.534:05
.536:34	.537:24	.538:32	.540:03	:540:08
.540:20				
C. DIE OFFENBARE RELIGION ... S.545				
.545:03	.548:26	:550:07	.550:18	.551:12
.552:14	:552:30	.553:12	.553:18	.553:29
.554:16	.554:22	.554:32	.556:01	.556:19
.559:13	.561:11	.565:19	.565:33	.566:35
.567:22	.567:29	.569:15	.570:2	.571:32
VIII. Das absolute Wissen ... S.575				
.575:25	.579:25	.579:33	.580:31	.581:01
.581:06	.581:08	.581:18	.582:18	.583:14
.583:16	.583:22	.584:02	.584:14	.585:13
.586:24	.586:25	.586:36	.589:33	

denn の出現箇所五九九件のうち、圧倒的多数の五八九件(九八%)
 が文の先頭にあつて定動詞の位置に影響を及ぼしていない並列接続詞で
 あつて、それ以外のものは一〇件にすぎない(その少数事例の構文上の

位置づけはそれぞれの註に略示する)。一般に、そうした文頭の並列接続詞は、『小学館の『独和大辞典』にあるように、「つねに文頭に置かれ、先行する叙述・主張・用語などの発言の根拠を話し手の立場から付加的に説明する」ものであり、英語の *for* に相当する「というのは、なぜなら、つまり、すなわち」という訳語を与えるのが適切とされる⁽¹⁴⁾。

このさい、「根拠」の説明ということで、その意義のより鮮明な「というのは、なぜなら」という訳語を選択して *denn* の意味をとったとき、当然ながらその日本語によって明確な意味限定が生じる。『大辞林』⁽¹⁵⁾によれば、「というのは」という連語の接続詞的な用法の意味は、「原因・理由の説明を導く語。そのわけは。なぜならば。」にあり、「なぜなら」という接続詞の意味は、「前に述べたことの原因・理由を説明するとき用いる。なぜかという。そのわけは。なんとすれば。なぜならば。」にある。したがって、一般に、文頭の並列接続詞 *denn* に導かれる文は、前文の「原因・理由」を説明していると解せられることになるだろう。

「原因・理由」を表現する接続詞としては、他に従属接続詞として *weil*、*da* などがあるが、『精神の現象学』における *weil* の出現箇所は二八四件、*da* のそれは譲歩等の意味のものと混同しても六五件である。文頭の並列接続詞 *denn* の使用は、これらに比べて群を抜いているが (*weil* の約二倍)、このことは、『精神の現象学』の論脈を検討し評価するさいに重要な着眼点になる可能性がある。

三 文頭の並列接続詞 *denn* の根底的意味と多義性

ヘーゲルの『精神の現象学』において *denn* を解釈するさいの課題のほとんどは、前節で示したように、文頭の並列接続詞 *denn* の意味をどうとるかにかかるわけだが、そこで単純化したように、これを「根拠」の説明として日本語における厳密な「原因・理由」としてだけ考えると、じつは確実に足がすくわれる⁽¹⁶⁾。このことは、小学館の『独和大辞典』でその訳語に「つまり、すなわち」が与えられていることだけでもただちに予想のつくことである。ただ、それにもまして、よしんば「原因・理由」として考えるときでも、*denn* を *weil* と同列のものと考えすることは、厳に戒められなければならない事情がある。

『独和大辞典』は、その弊を充分に予想してか、補注までつけて *denn* と *weil* の機能を取り違えないようにとくに注意している。すなわち、「*weil* 副文の内容と主文の内容との間には因果関係が成立しなければならぬが、*denn* に続く文は、先行の発言に対する話し手の判断の根拠を述べるもので、文内容自体の因果関係は必ずしも要求されない⁽¹⁷⁾とする。その例解に倣えば、「木陰がある『から』日が照っている。」という場合の「から」も、「日が照っている『から』木陰がある。」という場合の「から」も、*denn* であれば表現することができるわけである (*weil* の場合は因果関係を表現する後者のみとなる)。

denn u dann denn が「原因・理由」を意味する場合でも、因果関係以外のそれを指示しうる事情は、その語の素性に深く関わっていると思われる。グリムの辞書によると、denn と dann という「二つの形態の区別は、十八世紀中葉に確定したというものの、今日いかなる場合でも厳密になされているかという点、必ずしもそうではない」(GRIMM 2:945)⁽²⁰⁾。古高ドイツ語においては danna, danne, denni, denne らが、中高ドイツ語においては danne, denne らが、ラテン語で *tum* (*engl. then*), *tunc* (*engl. then, at that time*), *deinde* (*engl. thereafter, thereupon*) とともに *nam, enim* の意味をなし、比較の意識があるときには *quam* (*engl. in what manner, how, etc.*) の意味をなすといわれている (GRIMM 2:740)⁽²¹⁾。

一八一一年に出版されたアーデルンクの辞書によると、dann は「時間または順序を暗示する」副詞とされており、denn を dann と言ふことは、南部ドイツ語では普通のこととされている (ADELUNG 1:1388)⁽²⁰⁾。もちろん、本論で問題にしているのは、ヘーゲルが『精神の現象学』においてシユヴァーベン訛りを丸出しにして、並列接続詞として denn の代わりに dann を用いている、などという事実と反することではない⁽²¹⁾。むしろ、ここで注目しておきたいのは、denn が dann と当時においてすら意味的に互換性をもった語として通用していた事実のほうである (BAUER 4:309)⁽²²⁾。

denn が先述のラテン語でどの意味で理解されようとも、その意味の根底には、「時間または順序」の意識が働いている。グリムの辞書は、

dann の第一の意味として、「出来た後の時点、ある条件が満たされた時点を示し、*tum, tunc* と同様である」としているが (GRIMM ebd.)、こうした事後意識が denn の言明を支えている。

先ほどの「木陰がある『から』日が照っている。」に対応する『独和大辞典』の文例は、*Die Sonne scheint, denn der Baum wirft Schatten.* だが、先に「日が照っている」ことに思い至り、いわば後追的にその「理由」として「木陰がある」ことを言い募るものといえないだろうか。あるいは、denn の構文上の並列性にもかかわらず、語りたことこの当面の本体は、主文というべき前件にあつて、denn に導かれる後件は、『独和大辞典』も指摘するようにあくまで「付加的」なものなのである。こうしたいわば言い訳的な「理由・原因」の提示が、事柄としての因果関係を保証するものでないことは、我々の日常的な意識にもなっている。また、denn に導かれる後件があくまで事後意識に由来するからこそ、それが登場した時点で主文の前件はそれとして完結してしまうのであり、『独和大辞典』が指摘するように前件において「denn を否定することはできない」という次第となるのも、納得のところである。

もちろん、dann にせよ denn にせよ、文頭で並列接続詞として機能するときには、定動詞の位置に影響を及ぼさない。したがって、そこには、他の副詞的な位置をとる場合（すなわち、定動詞の位置に影響を及ぼす場合）と区別されるなんらかの構文上の位置づけ、それゆえそれに基づき意味づけが働いていることは否めないであろう。とはいえ、そのような位置づけや意味づけを捉える場合であっても、denn によって語

られるものには話者の事後意識が働いている、という根底をつかんで離さないことが必要だと思われる。

ラテン語 *nam, enim* の意味 と同じで、*denn* が *dann* と区別されて独自の機能を担うことになったとき、*denn* には、「比較や否定を背後にした *nam, enim, quam* の意味」が担わされることになる (GRIMM 2740)。グリムの辞書は、*denn* の項目においてその意味を七つに分類して説明するが、それは、*dann* と区別されることでの *denn* の説明となっている (GRIMM 2948f)。そのうち、用例に照らして、文頭にあり定動詞の位置に影響を及ぼさないのは、次の一項のみである。

「一、今では、*nam* の意味で安定している。 *dann* の七 a。」(ebd.)⁽²³⁾

dann 七 a の説明では、「文の初めで *nam* や *enim* となる *dann*」とある。このことを *dann* と *denn* がいわば渾然一体となっていたときの意味と比べるなら、ラテン語でいう *tum, tunc, deinde* とともに *nam, enim* の意味を有していた事態から、*denn* が主に *nam, enim* の意味を担う方向へと機能分化が果たされた、ということができらるだろう。

なお、アーデルンクの辞書は、*denn* の項目においてその意味を七つに分類して説明するが、グリムの辞書の第一項に対応する説明は、次の通りである。「*denn* は、つねに直説法を引き受け、たいいていの場合文の自然な語の組み合わせを変更しない接続詞である。この接続詞は、一、先行する言明の原因を示す。この原因の意味では、接続詞は、文の始ま

りに位置する」。「*denn* が原因を含む文は、ときおり明白でないことがあるが、こうした文が原因だと理解されなければならぬことがある」(強調点は我々)。「強調するためには、語の通常の順序もときおり変更しうる。おそらく、その背後に別のなにかがある」(ADELUNG 11450f.)⁽²⁴⁾

さて、当面する十九世紀初頭の著作であるヘーゲルの『精神の現象学』において我々が解釈すべき文頭の並列接続詞 *denn* は、「一応 *dann* との機能分化が果たされた十八世紀中葉以降の時期にあるものとして、ラテン語でいう *nam, enim* の意味を担うものとして考えられる必要があるだろう。よしんば *dann* との混同があるとしても、並列接続詞としての構文上の位置づけからすれば、それ自体 *nam, enim* の意味で解されるのが先決であると思われる。ただ、この際にも、あくまで *denn* には、話者の主観的な事後意識があることに注意が払われるべきだろう。このことは、最終的に日本語としての意味を判断する際の指導的な理念になるにちがいない。

レーヴィスのラテン語辞書によれば、*nam* は、第一に、「確認や説明を導く」ものとして、英語の *for* の役割を果たすとされる (LEWIS 1884f.)。これは、基本的に次のような二つの意義に分類される。⁽²⁵⁾

A. すでに語られたなにごとについての説明またはより充実した言明を導く。

B. 事実または命令、原理に対する根拠や理由を導く。

Aの特記事項で記憶にとどめておくべきは、「一般的な言明を解説する例を導く」用例が含まれることである。

また、Bの特記事項には、「言表の特殊な形式に対する話者の説明などを導く」とあり、より緩和すると「前件を言う際の話者の理由を導く」とし、まったく緩和すると「前件を擁護する特殊な事実や議論を導く」として“but, now, certainly”の訳語が与えられる。

第二に、「転換」において用いられる。この際、「新しい主題を第二次的に重要なものとして導く」として“but now, on the other hand”の訳語が与えられる。その特記事項には、「議論するには明白すぎる考慮事項に言及する」として“but, now, certainly, etc.”の訳語が与えられる。

第三に、疑問文における役割が記されているが、これは、本論において考慮不要であろう。

他方、ラテン語の *enim* は、接続詞でも指示確認の不変化詞であり、第一に、「先行する言明を確認する」として“truly, certainly, to be sure, indeed, in fact”の訳が与えられる (LEWIS 646)。

第二に、その意味を拡張したとき、次の二つの意味が認められる。

A. 先行する言明の理由を証明したり示したりする。“for” (所与の言明や理由が心理的に与えられている場合がある。)

B. 先行する言明を説明する。“for instance, namely”

並列接続詞 *denn* の意味の総括 さて、我々としては、最終的には日本語としての理解が実用的に達成できればよいという観点から、*denn*

の意味をなすとされる *nam* または *enim* の意味を独断により次のように総括してみる。もともと、日本語の意味を各項において逐一あげつらうまでもないであろう。

考慮すべき *nam, enim* の意味 (≠ *denn* の意味)

一 確認や説明 (*for*)

① 自明 (*but, now, certainly*)

② 確認 (*truly, certainly, to be sure, indeed, in fact*)

③ 説明 (例示・言ひ換え) (*for instance, namely*)

④ 証明 (*for*)

二 転換 (*but now, on the other hand*)

ところで、このように総括した *nam, enim* の諸義は、あくまでラテン語を考えての意味であるから、ドイツ語 *denn* の意味の必要条件ではあってもその十分条件とまではいえない、ともいわれるかもしれない。つまり、ラテン語での意味をさらにドイツ語の観点で吟味する必要があらう。

ヘーゲルが生きた当時のドイツ語学者バウアーが分析した並列接続詞としての *denn* の意味の解明に依拠してみよう。バウアーによれば、こうである。「もともと重要な用法は、因由の用法であって、これにより *denn* は、先行する思想の根拠 (*Grund*) を示す」。この「根拠」は、「ほとんどつねに論理的な根拠、理性根拠、理性推論という本来の根拠として考えられる」が、「原因 (*Ursache*) という実在的根拠」であるとも、

「運動根拠、いわゆる道徳的根拠」であるとも考えることができる (BAUER 4309)。

ここで、バウアーがいう「根拠」は、アーデルンクによる意味の分類に依拠しながら、独自にそれを整理するものである。

すなわち、アーデルンクによれば、「根拠」とは、「ある(ものごと)があることを、またなにゆえそれがそうであって他のことではないのかを理解させるすべてのこと」であり、これはさらに、(一)「運動根拠、原因」、(二)「实在根拠」、(三)「認識根拠」、(四)「証明根拠」に分けられる (BAUER 4291f. vgl. ADELUNG 2828)⁽²⁶⁾。また、このうち「原因」については、広義には認識の根拠をも含むことになり、狭義には「現実的な原因、causa efficiens」と「運動させる原因、運動根拠」を含むことをバウアーは引証している (BAUER ebd. vgl. ADELUNG 4966f.)⁽²⁷⁾。そのうえで、バウアーがいう「論理的な根拠」とは、「出来事や事実、事柄の認識根拠や証明根拠」であり、それは、「ある事柄を考えられたものにつねに関係させ、推論の判断や、決心を引き起こすものと同じ」である。これに対し、「原因」は、「生じたこと (Geschehende)」に係し、「なぜ出来事や事実、状態、行為が生じるのか」を示すから、「実在的根拠」と一致するし、「運動根拠や道徳的根拠」とみなされることもあるとする (BAUER 4292)。

要するに、先に示したバウアーがいう *denn* の「もつとも重要な用法」は、これらの「論理的根拠」や「原因」のすべてを包括するということである。このことは、現代ドイツ語において、ヘルビヒとブッシャ

が *denn* には「客観的現象の原因を表わすものと、認識的判断の根拠を表わすものがある」とする⁽²⁸⁾ことに引き継がれているであろう。

当然ながら、この種の根拠は、事柄を主観的な根拠から確認し説明することを許すならば、主観性の持ち出すなにごとも、*denn* が包括するとせざるをえない性質のものである。もつとも、バウアーは、さすがにこのような素人の説明をしない。とはいえ、「*denn* を伴う文は、先行する思想や文の真の根拠を含まないことが往々にしてある。むしろ、こうした根拠がまったく省かれて、本来根拠づけられるはずの思想を付け加え、省略表現を補足することを聞き手や読み手に前提する」(強調点は我々) という指摘をしている (BAUER 4309)。バウアー的な発想では、例えば、*A, denn B.* という文があるとき、*B* が直接に *A* の根拠たりえない場合は、両者の媒介項 *C* を見立てて、*A* と *C*、*B* と *C* の間に根拠が成り立つように考えることになる (ebd. 4310)。しかしながら、こうした媒介項 *C* の設定は、外面的に隠されたものとしては、語り手・書き手であろうが、聞き手・読み手であろうが、その考え方一つにかかっている面があることを否定することは難しからう。

したがって、こうした事情は、*denn* の意味をたんにいわゆる根拠の観点で語るべきでない、としたほうが、「根拠」の観念に忠実になって下手な推論を捏造するよりましである、という判断を導くものである。ヴァインリヒが *denn* を「浮き彫り接続詞 (Relief-Konjunktion)」と称し、その特徴的な意味を「理由」と「浮き彫り」として、「浮き彫り」の「論証」を「目立つことと目立たないこととの間の仲介をする」点に捉

えたのは、⁽²⁹⁾ denn を前後して推論があらざるをえないとしても、すべてを「根拠」に還元して媒介関係を追跡しなくてはやまなしい術学的態度を斥けるものとして評価したい。

こうした見方で、先ほどの独断的な「nam, enim の意味」の総括を振り返るとき、いずれもが denn の意味として相当することに肯かれると思う。「確認や説明」のうち「証明」の意味のみが denn にあたるとするのは、少なくとも、denn の「浮き彫り」性を無視した議論にならざるをえない。積極的にいえば、「自明」や「確認」は、直接的に先行文の「根拠」たりうるだろうし、「例示・言い換え」などによる「説明」は、実証主義的精神ならばむしろ本筋の「根拠」づけとなるだろう。「確認や説明」で挙げた諸義は、いずれも denn の意味の説明として十分に通用するであろう。

そして、こうした主観的な「根拠」づけなり「浮き彫り」の極北には、話題それ自体を変えてしまうことまでもが有りうることを覚悟しなければならぬのかもしれない。というのも、理由の説明が求められて釈明不能となったとき、無関係のなにごとかを語って頬かむりする「転換」の方法がかなりの程度「有力」であることを、我々は、日常会話において、あるいはむしろいっそう学術討論において、身につまされるほどよくよく知っているからである。

四 『精神の現象学』における denn 解釈の実際

『精神の現象学』において denn といえば前件（主文）の「理由・原

因」だとする先入観をもって臨むと解釈上困難な問題を抱えることとなるテキストのいくつかについて検討することとする。⁽³⁰⁾

○ 解釈例第一 (68:21)

【テキスト】 [73③] Diese Besorgnis muß sich wohl sogar in die Überzeugung verwandeln, daß das ganze Beginnen, dasjenige, was an sich ist, durch das Erkennen dem Bewußtsein zu erwerben, in seinem Begriffe widersinnig sei, und zwischen das Erkennen und das Absolute eine sie schlechthin scheidende Grenze falle. [④] Denn ist das Erkennen das Werkzeug, sich des absoluten Wesens zu bemächtigen, so fällt sogleich auf, daß die Anwendung eines Werkzeugs auf eine Sache sie vielmehr nicht läßt, wie sie für sich ist, sondern eine Formierung und Veränderung mit ihr vornimmt. [⑤] Oder ist das Erkennen nicht Werkzeug unserer Tätigkeit, sondern gewissermaßen ein passives Medium, durch welches hindurch das Licht der Wahrheit an uns gelangt, so erhalten wir auch so sie nicht, wie sie an sich, sondern wie sie durch und in diesem Medium ist. (068:16-25)

【訳】 [七三③] こうした気のまわしはさらには昂じて確信めいたものとなり、〈それ自体としてどうか〉というところが認識によって意識のものとなるようにきちんとしていこうとするのは概念的に不条理だと確信したり、認識することと絶対的なものとの間にはそれを端的

に裁断する限界があるはずだと確信したりするにちがいない。(④) こうなる事情は以下の通りである。認識が絶対的な本質を我がものにする道具であるとしてみようか。そうしたら、すぐさまおかしな点が出てきて、事物に道具をあてがうことは、むしろ事物がそれだけで独立にあるようにさせないことで、むしろそのことによって形成や変化を企てることになってしまう。(⑤) あるいは、認識は、我々の活動の道具ではなく、いわば真理の光が我々に到達するさいにくぐり抜ける受動的媒体であるとしてどうか。そうであってもやはり、我々は、真理をそれ自体では獲得しないで、こうした媒体をつうじてそのなかにあるような真理を獲得することになる。

七三④の *denn* に続く *ist* 以下は、倒置文の形で条件を示し、第一文肢となっている。この文の定動詞は、*ist* である。

七三③の *Diese Besorgnis* の指示対象は、七三①の「認識というものが絶対者をわがものにする道具、あるいはそれを覗き見る手段として考察されるということ」を事前に知らせておくことである。

七三④と⑤の構文の形式は、*denn* の存否以外には同形であって、*denn* に配慮して考えれば、一体のものと考えなければならぬ。それゆえ、金子武蔵は、この二つの文を結合して翻訳し、*denn* の意味を「その理由はこうである」と独立した文で訳出したのだらう(金子七五)⁽³¹⁾。訳の是非はともかく、二つの文の機能を同一次元にみる金子の見解それ自身は正当だと思われる。

まず、形式的に *denn* 文の機能の面から考える。この *denn* は、並列接続詞であるから、それが直接的に「理由」づけるのは、本来的には主文の部分でしかなく、従属文である *des* 文の内容ではない、ということがある。⁽³²⁾ つまり、*denn* が「理由」ならば、「気のまわし」(A)が「確信めいたものになる」(B) 必然的な事情を解き明かすべきものとして機能するはずである。そのさいの「確信」とは、「それ自体」を認識するのは「不条理 (*widersinnig*)」とみたり、認識と「絶対的なもの」の間に限界があるとみたりすることである (B)。

七三④では、認識を「絶対的な本質」を獲得する「道具」として考えると (A)、事物を変化させるとある (C)。この C と「確信」(B) との間には、ある媒介が欠けていると思われる。というのも、例えば、認識による事物の変化が「それ自体」または「絶対的なもの」と無縁でなければならぬ、などという前提 (D) があってはじめて、C が B の理由として成り立つからである。もともと、この前提を自明とみれば、C と B との間の媒介の欠如感に至らないかもしれない。なお、以上と同様のことは、七三⑤においてもいえる。

ヘーゲルの議論はどうかというと、七三④⑤を総括してさらに七三⑥において、「この二ついずれの場合も、目的 [D] とは正反対の事態 [C] をただちに引き起こす手段を我々が使用しているわけであり、つまり、むしろ、我々が一般に手段を利用する [A] というのが、不条理なこと (*das Widersinnige*) なのである [B]」とする。要するに、ここでは、七三④⑤が「目的とは正反対の事態 (*Gegenteil*)」と位置づけ

られることによって、A—Bの結合が解き明かされている。もちろん、たんに「目的」と記述するだけでは、それがDの前提たるにふさわしくないとみられるかもしれないが、「正反対の事態」が示されることにより、なお推論的であるとしても、まったくそれすら欠いていた七三④⑤よりは、CとBとの媒介を果たしているといえるだろう。

以上の事情からすると、dennを「理由」と考えたとすれば、少なくとも七三⑥までがこのdennに支配されている、とみななければならない。しかしながら、これではなお不足ともいえる。というのも、七三⑥で中締めされたのは、七三③において一方でいわれた「それ自体」に関わるだけで、他方の「絶対的なもの」についての言及がまだされていない、とみることができるからである。実際、ヘーゲルの議論では、七三⑦以降で「絶対的なもの」についての「限界」の議論がなされる。すると、実に、七三③で語られたBの「確信」については、順次七三④～⑩で議論が展開されることになり、dennを「理由」の意味にとるなら、これらすべてとしなければ収まりがつかないだろう。金子が「その理由はこうである」と訳したのは、慧眼かもしれない。しかし、金子は、七三④⑤で「から」と結んで、「理由」をさしきつてとめており、「理由」の不足感⁽³³⁾は否めない。

しかしながら、このように考えるに至るのは、「理由」を「証明」するものとしての意味を強くdennに求めてこれと整合させようとするからであり、その限りでのことである。実際の文章においても、途中からdennに導かれる部分があって(七三⑦⑩)、七三④のdennの作用

域が七三④～⑩全体だとするなら、いわばdennの「入れ子」が発生することになり、そのような作用域の理解は、まったくの無理筋であろう。とはいえ、文脈の理解では、七三④～⑩が七三③の命題を順次「説明」しようとしていることだけは確かなことである。すると、dennに対する訳は、尻切れトンボの説明とするのではない形で選択すれば足りる、ということになる。にもかかわらず、あえてそれを「理由」と捉え、さらに不適切な位置で「から」と結ぶことにより、推論の余地を残す判断を放置するのは、全体を読んで文脈を理解することに対する重大な妨害という以外にないだろう。

○解釈例第二(88:18)

【テキスト】〔105①〕 Da hiermit diese Gewißheit nicht mehr herzutreten will, wenn wir sie auf ein Jetzt, das Nacht ist, oder auf einen Ich, dem es Nacht ist, aufmerksam machen, so treten wir zu ihr hinzu und lassen uns das Jetzt zeigen, das behauptet wird.〔②〕 Zeigen müssen wir es uns lassen, denn die Wahrheit dieser unmittelbaren Beziehung ist die Wahrheit dieses Ich, der sich auf ein Jetzt oder ein Hier einschränkt.〔③〕 Würden wir nachher diese Wahrheit vornehmen oder entfernt davon stehen, so hätte sie gar keine Bedeutung; denn wir höben die Unmittelbarkeit auf, die ihr wesentlich ist. (88:14-23)

【訳】〔一〇五①〕 かくした確信に対して、〈夜である今〉に、あるこ

は〈今が夜であるとする自我〉に我々が注意を向けさせると、その確信の方は、前述の次第で歩み寄ってこようとしなから、我々の方が、その確信に歩み寄り、主張されている〈今〉を我々がみずからに指し示すようにしよう。⁽³⁴⁾〔②〕我々は、自分のみずからに〈今〉を指し示すようにしなければならぬ。確かに、こうした直接的な関係の真理は、ある〈今〉やある〈この〉に制限された〈この〉私の真理である。〔③〕仮に我々が、後になって、この真理を取り上げるにせよ、それから離れるにせよ、この真理は、まったく意味をもたないだろう。というのも、我々は、この真理にとって本質的である直接態を廃棄しているからである。

一〇五①では、「〈今〉を我々がみずからに指し示す」のは、既定路線だが、hermitの事情によってそうになっている。一〇五②では、それが義務(müssen)に昇格する。こうした昇格には理由が必要だと考えれば、den以下にそれを求めざるをえないだろう。しかし、den文は、その要請に答えているだろうか？

「我々」の〈私〉が〈この〉私にすぎないから、そうした〈我々〉に「指し示す」作業をさせて私の〈この〉あり方を暴露させるといふのは、種明かしをした後の手品であり、いわゆる「やらせ」である。一〇五②のdenの意味を「理由」ととれば、そうしたやらせの必然性を説くものと解釈する以外に道はないだろう。しかし、「〈今〉を我々がみずからに指し示す」必要があるのは、「確信」が Meinungの立場として自己

反省能力を欠き、より高次の議論に展開していくことができないからである。つまり、一〇五①において、そのことの必要性は十分に説かれていた。したがって、一〇五②において、müssenを説明するただそのことのためだけに、den文を付加する必要性はないのである。

このden文は、「理由」を「証明」するものとして考えると、その議論自身がシュールになる性質のものである。したがって、この文を、例えば金子のように、「から」と結んで先行部分の「理由」とするような訳にはならない(金子一〇三)⁽³⁵⁾。このdenは、「自明」または「確認」の意味で考えなければ、ヘーゲルの議論を誤解や意味不明に沈めることになる。

なお、形式上の問題として、「denが原因を指し示すとき、それがある文の前には、本来、コロンかセミコロンがある。しかし、先行する文がかえって短いときには、たんなるコンマでも十分である」(強調点は我々)とアーデルンクは指摘する(ADELUNG 1:1452)⁽³⁶⁾。一〇五②の先行主文が短いゆえにコンマとなったのか、あるいはそれ以外に形態によって「原因」を示さないとの趣旨があるためそうだったのかは、浅学には計り知れないが、こうした観点もあることを備忘のために記しておく。

○解釈例第三(97:15)

【テキスト】[116⑤] Sein Kriterium der Wahrheit ist daher die Sichselbstgleichheit, und sein Verhalten als sich selbst gleiches

aufzufassen. [⑥] Indem zugleich das Verschiedene für es ist, ist es ein Beziehen der verschiedenen Momente seines Auffassens aufeinander; wenn sich aber in dieser Vergleichung eine Ungleichheit hervorut, so ist dies nicht eine Unwahrheit des Gegenstandes, denn er ist das sich selbst Gleiche, sondern des Wahrnehmens. (97:9-16)

【訳】「一一六⑤」それゆえ、知覚する者にとっての真理の基準は、自己「同等性」であり、自分の振る舞いを自己「同等」なものとして受け取る理解である。[⑥]同時に、知覚する者に対して相異なるものがあることよって、知覚する者は、それを受け取る理解をする際の相異なる契機を相互に関係させるものである。だが、この比較で不等態が頭角を現わすとしても、このことは、対象が非真理だということではない。確かに、対象は自分に等しいものである。むしろ、そのことは、知覚することの方が非真理だということである。

denn に先行する主文は、「比較で不等態が頭角を現わす」ことが「対象が非真理だということではない」ということ。denn 文は、「対象」が「自己「同等」であるということ。ここには、一見、denn に「理由」づけの意味を認めることができそうである。「対象」は、「自己「同等」であるから、基準に従って「真理」である(A)。だから、「比較」で「不等態」が出てくることは、「対象」を「非真理」にするものではない(B)。金子は、基本的にこのように理解する(金子一一五)³⁷。

しかし、この議論になにか不足感が残るのは、我々だけのことだろうか。「対象」が「自己「同等」である」と、「比較」で「対象」が「不等」になることとの関係——今の場合は「無関係」という関係——(C)が述べられていないのである。もちろん、解釈例第一の場合でもそうだったのと同様に、このことが自明の前提とみなしうるなら——それゆえそれを論うのが野暮というなら——、疑問は封殺される。しかし、疑問を惹起するような「理由」づけをするまでもあるまい、という抵抗の仕方もある。しかも、「理由」とみなしているのは、あくまで翻訳という「比較」をする解釈者の側であって、我々が相手にする「対象」たるヘーゲルのテキストではない、となれば、なおさらである。ヘーゲルのテキストは、「自己「同等」的にdennと主張しているのであって、dennは、その本性上「理由」として一義確定しているわけではないらである。

「対象」が「真理」であるとするとAと、「比較」で「対象」が「非真理」にならないとするBとは、「比較」を除けば——したがってCのごとく「対象」が「比較」と無関係であるとすれば——、「否定の否定」を介して同一である。ヘーゲルは、Aの後にその「否定の否定」であるBを提示するわけだが、これが「理由」づけといえる性格のものであるかどうか、我々には自信がない。それは、「あなたはどのような方ですか?」と問われて、「私は私以外のなものでもない」と煙に巻いているのと同じだからである。

しかし、現実の問題としては、一切の関係を超越して「私以外のなに

ものでもない」と居直らざるをえない局面というものも多々あるわけである。こうした「理由」の彼岸にあるものの直示は、事実の「確認」として理解したほうが妥当だと思われる。今のテキストの場合、「対象」を「自己同等」であるとした一六〇③の言明が維持されている事実を確認して、「対象」の「非真理」を打ち消しているにすぎない。

○解釈例第四 (128:07)

【テキスト】 [157③] Diese zweite übersinnliche Welt ist auf diese Weise die *verkehrte* Welt, und zwar, indem eine Seite schon an der ersten übersinnlichen Welt vorhanden ist, die *verkehrte* dieser *ersten*.

〔④〕 Das Innere ist damit als Erscheinung vollendet. 〔⑤〕 Denn die erste übersinnliche Welt war nur die *unmittelbare* Erhebung der wahrgenommenen Welt in das allgemeine Element; sie hatte ihr notwendiges Gegenbild an dieser, welche noch *für sich* das *Prinzip des Wechsels* und der *Veränderung* behielt; das erste Reich der Gesetze *entbehrte* dessen, erhält es aber als *verkehrte* Welt. (128:03-13)

【訳】 [一五七③] こうしたあり方で、この第二次の超感性的世界は、顛倒した世界である。しかも、一面がすでに第一次の超感性的世界に現前することによって、第二次の超感性的世界は、この第一次の超感性的世界の顛倒した世界となる。〔④〕このことによって、内的なものは、現象として完成している。〔⑤〕考えてみると、第一次の超感

性的世界は、知覚的世界を普遍的なエレメントへ直接に、高めたものにすぎなかった。第一次の超感性的世界は、知覚的世界のところ必然的な倒立像をもっていて、この知覚的世界は、なんといつてもそれだけ、独立に、交替と変化の原理を保持していた。法則の最初の国は、そうした原理を欠いていたが、その原理を顛倒した世界として獲得している。

この箇所は、ある言明に関して、damitで理由を説明した後、さらに加えて denn の並列文が重ねられる箇所である。 damit によれば、「内的なもの」が「現象として完成」する理由は、「第二次の超感性的世界」が「第一次の超感性的世界」に現前しつつこの「顛倒した世界」となっていることにある。

denn 以下は、この文最後まで、回顧の形態をとる。もともと、最後の erhält は、現在形であるが、「現象として完成」との関わりでいえば、「獲得」の完成ゆえに現在なのであって、本質的に回顧の意味を失わな^い。この回顧の主眼は、「交替と変化の原理」が「第二次の超感性的世界」で獲得されたことにある。

denn を理由として理解しようとするなら、その作用域は、途中にある二つのセミコロンを乗り越えて文末までに達するとしなければならぬ。もちろん、そのことは形式的に可能であり、むしろただそのことによってのみ、denn は、理由として理解可能となるだろう。別言すれば、denn の作用域を途中にある最初または第二のセミコロンのままでとすれ

ば、denn がなにゆえ理由となりうるのか、まったく意味不明となる。というのも、その作用域の理解では、「第一次の超感性的世界」の在り様以外の要素が語られないからである。金子の訳は、denn の作用域を第一のセシロンまでとするもので、まったくの意味不明訳といわざるをえない（金子一五六）⁽³⁸⁾。

ところで、denn の作用域を文末まで達するとして理解しようとしたときに、damit の指示先である一五七③の内容との差異を考えると、「現象として完成」することの説明を、denn 文では「交替と変化の原理」に求め、一五七③では「第二次の超感性的世界」に求めている違いが認められる。しかしながら、「第二次の超感性的世界」である「第二次の法則」が登場する前段落をみると、ここには違いが認められない。というのも、一五六⑦で言明されるように、第二次の「法則」は、「力の遊戯」における「絶対的な移行であり純粋な交替」に準ずるものだからである。つまり、「交替と変化の原理」と「第二次の超感性的世界」は、表現は異なるが、実は同じ事態を指示している。ということは、denn の作用域を文末まで求めたとしても、高々「言い換え」としての「説明」しかもたらさないのである。

○解釈例第五 (144:36, 145:03)

【テキスト】 [177①] Es ist ein Selbstbewusstsein für ein Selbstbewusstsein. [②] Erst hierdurch ist es in der Tat denn erst hierin wird für es die Einheit seiner selbst in seinem Anderssein. Ich, das

der Gegenstand seines Begriffs ist, ist in der Tat nicht Gegenstand; der Gegenstand der Begierde aber ist nur selbständig, denn er ist die allgemeine unverfügbare Substanz, das flüssige sichselbstgleiche Wesen. (144:35-145:05)

【訳】 [一七七①] 生命ある自己意識は、自己意識に対する自己意識である。[②] これによつてはじめて、生命ある自己意識が実際に存在する。まことに、このなかではじめて、自己意識にとつて、みずからの他のあり方のなかで自分自身と統一しているということが生ずる。自己意識の概念にとつて対象である自我は、実際には対象ではない。だが、欲望の対象は、もっぱら自立的である。つまり、それは、根絶できない普遍的な実体であり、みずからと同等で流動的な本質である。

一七七②における第一のdenn文の内容は、一七七①の「自己意識に対する自己意識」つまりいわば間自己意識と呼ぶものにおいてはじめて(erst hierin) (A)、「自己意識の統一が生成していることを告げるものである(B)」。これに対し、先行する主文は、間自己意識によつてはじめて(erst hierdurch) (A)、「生命ある自己意識」の存在を語りうるとする(C)。Aにはinとdurchの差異があるが、むしろ我々がここで考えなければならないのは、Bの自己意識の統一という事態とCの「生命ある自己意識」の存在とがいかなる関係に立つか、ということだろう。「生命ある自己意識」は、「類」であるから、実は自己意識の統一と同じ事態である。その間に因果関係を追及するのは、鶏卵問題だろう。

したがって、*denn* は、「言い換え」または「確認」の意味で捉えるのが本筋ということになる。

金子は、この第一の *denn* を「なぜなら」と訳す⁽⁴⁰⁾。金子は、先行する本文の *es* を「生命ある自己意識」と読まずにたんに「自己意識」と読むから、一七七②の文全体は、自己意識の統一があることによって一つの個別の自己意識がはじめて存在するかのように読まなければならない。この場での議論の焦点は、事柄の是非ではなく、テキストの理解である。このことは、自己意識章のテーマが、個別的自己意識の存在証明をすることにあるのか、普遍的自己意識の存在証明をすることにあるのか、ということにも繋がる。もちろん、これを前者と採るなら、理性への道を塞ぐことになるだろう。

さて、一七七②における第二の *denn* 文の内容は、「欲望の対象」(A) が「普遍的な実体」や「流動的な本質」(B) となっていることである。これに対し、先行する本文は、「欲望の対象」が「自立的」(C) であることである。したがって、ここでも、BとCとの関係の理解が先決となる。「自立的」であることと「普遍」や「流動」との関係を理解するには、前段落末尾の文を検討するのが捷徑である。

【テキスト】 [176⑥] Die unterschiedene, nur lebendige Gestalt hebt wohl im Prozesse des Lebens selbst auch ihre Selbständigkeit auf, aber sie hört mit ihrem Unterschiede auf, zu sein, was sie ist; der Gegenstand des Selbstbewußtseins ist aber ebenso selbständig in

dieser Negativität seiner selbst; und damit ist er für sich selbst Gattung, allgemeine Flüssigkeit in der Eigenheit seiner Absonderung; er ist lebendiges Selbstbewußtsein. (144:27-34)

【訳】 [一七六⑥] 区別されてかえって生命ある形態は、たしかに、生命の過程そのものなかでみずからの自立態も廃棄するが、みずからの区別によって形態であることをやめる。しかし、自己意識の対象は、自分自身のこのような否定態にあっても、これまでと同様に自立的である。これによって、自己意識の対象は、みずからを分化した独自のものでありながら、それだけでそれ自身独立して類であり普遍的な流動態である。こういう自己意識の対象は、生命ある自己意識である。

要するに、ここで「自己意識の対象」は、「生命ある自己意識」だが、「自立的」であり、そのことによって (*damit*) 「普遍的な流動態」である。一七七②における第二の *denn* 文は、この部分をなぞっている。しかも、一七六⑥で重要なことは、「普遍的な流動体」となる理由を「自立的」であることに求めていることである。つまり、「CだからB」なのである。しかし、第二の *denn* を「理由」と捉えるなら、この関係を逆転させることになるだろう。つまり、「BならびにC」である。しかし、*denn* を絶対に「理由」と捉えなければならぬといわれない以上は、こうした逆転をもたすまでもない。金子は、ここを「なぜなら」と訳すが、この場合は誤訳に属する⁽⁴¹⁾。

○ 解釈例第六 (182:27)

【テキスト】 [236①] Weil nun so der Vernunft die reine Wesenheit der Dinge, wie ihr Unterschied, angehört, so könnte eigentlich überhaupt nicht mehr von *Dingen* die Rede sein, d. h. einem solchen, welches für das Bewußtsein nur das Negative seiner selbst wäre.

【②】 Denn die vielen Kategorien sind *Arten* der reinen Kategorie, heißt: sie ist noch ihre *Gattung* oder *Wesen*, nicht ihnen entgegengesetzt. (182:23-182:29)

【訳】 「二三六①」というので、理性には「ものごと」の純粹本質態とその区別が属するので、「ものごと」について、すなわち、意識にとって自分自身の否定的なものにすぎないようなものについては、一般的にいつて、もはや本来的に語る事ができないだろう。【②】この場合、多数のカテゴリーは、純粹カテゴリーの種なのである。このことは、純粹カテゴリーが、まだ多数のカテゴリーの類つまり本質であって、多数のカテゴリーに対立するものではない、ということである。

この箇所は、ある言明に関して、weilで理由を説明した後、さらに加えてdenn文が重ねられる箇所である。

〈ものごと〉について「本来的に語る事ができない」と二式で反実仮定の言明されるが、まず、weilとしての理由とされるものが、「純

粹本質態とその区別」が「理性」に属していて〈ものごと〉に属していないことである。つまり、〈ものごと〉に属していないもので、〈ものごと〉を語る事はできないだろう、というのである。もちろん、ことほど左様だが、現実には、そのようなことがなされているから、「語る」事ができない」とするほうが反実仮定の憂き目を見る。

denn文のdennの意味確定を保留しておいて、その内容だけを考えて「純粹カテゴリー」と「多数のカテゴリー」とが種類関係をなして対立しあわない、ということ以外にない。これは、カテゴリーが「理性」に属するその属し方に関わるのであって、〈ものごと〉を「語る」事ができない」事態については是非とも指摘しておかなければならない理由というべきものとはいえないだろう。よしんば、その属し方もあわせて理由としなければならぬと強弁するとしても、denn文の内容は、weil文の内容の補強というべきもので、二三六①主文の二式の反実仮想を導くには、やはりweil文の内容で十分といえよう。

こうしたときに、dennを「なぜなら」と訳すのは、誤訳に属するといふべきである。金子の理解では、dennは「なぜなら」である(金子二三七)⁽⁴²⁾。むしろ、dennの解釈可能な範囲で捉えるなら、「説明」に属するものが最適ということになる。そう解釈してこそ、次の文二三六③との接続も滑らかになる。すなわち……

【テキスト】 [236③] Aber sie sind schon das Zweideutige, welches zugleich das Anderssein gegen die reine Kategorie in seiner Vielheit

an sich hat. (182:29-31)

【訳】〔二三六③〕だが、多数のカテゴリーとは、すでに両義的なものであり、だから、加えて両義的なものは、多数態ということ、純粹カテゴリーに対する、他のあり方をそれ自体に具えている。

この文二三六③は、「カテゴリー」の議論に終始している。これは、*denn*文である前文二三六②の内容を受けている。その *denn* 文をその前文の二三六①の理由と考えるのであれば、内容上の観点から、この文二三六③も同様に二三六①の理由と考えざるをえないだろう。果たして、こうした解釈が支持できるだろうか。もちろん、我々は、その立場になり。この段落二三六では、この文以降も、「カテゴリー」の議論に終始することになり、二三六①主文の反実仮想を積極的に導く要素が示されないからには、なおさらである。

○解釈例第七 (440:30)

【テキスト】〔594⑬〕 Das Selbstbewußtsein ist also das reine Wissen von dem Wesen als reinem Wissen. 〔14〕 Es ferner als einzelnes Selbst ist nur die Form des Subjekts oder wirklichen Tuns, die von ihm als Form gewußt wird; ebenso ist für es die gegenständliche Wirklichkeit, das Sein, schlechthin selbstlose Form, denn sie wäre das nicht Gewußte; dies Wissen aber weiß das Wissen als das Wesen. (440:25-440:31)

【訳】〔五九四⑬〕それゆえ、自己意識は、純粹な知としての本質についての純粹な知である。〔14〕さらに、個別的な自己としての自己意識は、主体すなわち現実的な行いの形式にすぎないが、自己意識はこの形式を形式として知っている。同時に、対象的な現実態すなわち存在も、自己意識にとっては、端的に自己を欠いた形式である。とすると、自己を欠いた形式であれば、これは知られていないものになるだろうか。しかし、この知は、知を本質として知っている。

五九四⑭では、*denn* 文が二式になっている。それに先行する主文が現在形であるから、反実仮想または緩和した形でも婉曲と捉えられるものが「理由」となることはほぼ見込みがない。⁽⁴⁴⁾ 第三節でも示したように、*denn* 文は本来直説法の形をとる。少なくとも議論の世界では、無は有を生み出さなはずである。*denn* 文がセミコロンの切られた後の文は、現在形に復帰しているから、*denn* 文の作用域に入らないとみるのが当然だろう。ここは、*aber* で繋がられているが、*weiß* の逆接的事態は、*denn* 文の *das nicht Gewußte* である。つまり、最後のセミコロンの切られた文は、その前の *ebenso* 以下の文と逆接関係になっている。このような関係にあると、まず、*denn* を「理由」と訳すことは誤訳である。しかし、金子は、「あえて、*denn* を「なぜなら」と訳し、その文に「もしそうでないとすれば」を竄入させて、「理由」を維持しようとする（金子九一二）⁽⁴⁵⁾。こうなれば無理解を糊塗する創作である。*denn* が必ずしも「理由」を指示するわけではない、ということ

知っていればさぞ気が休まったことであろう。五九四⑬に従えば、自己意識が「純粹な知」である以上、「自己を欠く」わけがない。しかしながら、「存在」は「自己を欠いた形式」である。こうした矛盾する事態を「説明」しようとするれば、第三の道を示さなにかぎり、どちらかに軍配を挙げて、他方の欠を批判することになるだろう。ヘーゲルは、ここで、「自己を欠いた形式」であれば「知られていない」ことを反実として指摘する。つまり、事実は、「自己を欠いた形式」でも形式として知られていることを踏まえている。ヘーゲルは自己意識、「純粹な知」に肩入れするわけである。であるがゆえに、逆接のaberを続けて、「知を本質として知っている」と、そのことを追認することができる。

五 小括

わずかばかりの以上のような解釈例が、ヘーゲルの『精神の現象学』において並列接続詞dennを単純に「原因・理由」と考えるわけにはいかない典型的な例として説得的であるかどうかは、六〇〇弱ある事例からほんのパーセント強ビツクアップすることとどめざるをえない小論の事情に免じて容赦していただきたいと思う。しかし、むしろ、本論として本質的な主張は、以上に掲げた解釈例の妥当性以上に、並列接続詞dennを平板かつ機械的に「原因・理由」として解釈して、そのことよってヘーゲルの議論に常識的に理解できないなにかが生じたとしても、それは、ヘーゲルの責任ではなく、dennの意味を「語学」的に捉えることのできない解釈者の責任ではないか、という研究者の解釈態度

の是正の要求である。ここで重要なことは、dennには解釈者が「原因・結果」として理解することを超えた文脈論理が働いている、したがって、まずdennの意味を決め込むのではなく、前後の関係を精密に論理化してみる必要がある、ということを感じることができるかにある。

もちろん、管見でも、『精神の現象学』において並立接続詞dennに出合ったとき、それを「原因・理由」と考えて文脈的に前後関係が常識的理解とも整合する場合のほうが圧倒的である。とはいえ、決め打ちでこのdennを「原因・理由」と考えてしまつては筋違いの理解で無用の没論理的混乱に陥る局面も、テキストには潜んでいるのである。しかしながら、こうした事情を無視してdennといえは「原因・理由」と固執するならば、ヘーゲルを平明に理解することを彼方に追いやることは必定である。

もつとも、ヘーゲル理解には厄介な特有の先入見が忍び込む。すなわち、むしろこうした混乱にこそ絶対矛盾の自己同一をみて「弁証法」の真諦に触れた気になり、その混乱そのものがヘーゲルの議論の本質と心得え、そうした「落とし穴」にはまってヘーゲル研究の悦に入る（あるいは嫌気がさす）「研究」態度というものもみられるからである。もちろん、こうした場合には、「研究者」は、ヘーゲルそのものに関心があるのではなく、自分自身に関心があるわけである。しかし、ヘーゲルを出汁に使つたつもりでも、ヘーゲルの議論がそれを支えていなければ、一向に味がでてこないのではあるまいか。

註

- (1) 本稿は、平成十七年度跡見学園女子大学特別研究助成費の給付を受けた研究課題「ヘーゲル『精神現象学』序文」～「疎外された精神」の訳文・訳語データベースの編成」の研究成果の一部である。本稿をなすにあたっては、石川伊織（県立新潟女子短期大学）、柴田隆行（東洋大学）、早瀬明（京都外国語短期大学）との共同研究に依拠した。この場を借りて共同研究者への感謝の意を表したい。なお、本稿の議論の責任は、あくまで筆者にある。
- (2) SK03TEX.TXT (Modify Time: Fri Jan 08 12:08:30 1999.) Die 0.9x. Auflage für Windows 3.1, Windows 9x und Windows NT (den 22. Januar 1998), herausgegeben und korrigiert von Hisatake KATO (Kyoto Universität), Iori ISHIKAWA (Niigata Women's College) und Nobuhiro KAMİYAMA (Atomi College). なお、ドイツ語におけるウムラウトは、このテキストにおいて TEXAS®形式 (TEXt Analysing System を作成された弘前大学の清水明氏の提唱によるテキスト管理形式) で表現されているが、本論文における引用参照に際しては、これを適宜適切な表記に改めている。
- (3) Easy Checker Ver.2.1.17.46 (Copyright© 1994-2002 Hegelianer. All rights reserved. Hegelianer 管理者：石川伊織 開発担当：神山伸弘) を用いた検索による。
- (4) denn nur の例。
- (5) denn auch の例。
- (6) denn auch の例。
- (7) wenn ~ denn ~ の例。
- (8) nicht anders denn の例。
- (9) wenn denn の例。
- (10) als の代用の例。
- (11) als の代用の例。
- (12) nicht anders denn の例。

- (13) anders denn の例。
- (14) 国松孝二他編『独和大辞典』第二版コンパクト版、小学館、二〇〇〇年。
- (15) 松村明編『大辞林』第二版、三省堂、一九九五年。
- (16) もちろん、現代のドイツ語では、「原因・理由」と考えるだけで充分なのかもしれない。ヘルビヒとブッシヤによれば、denn は、「並列（主文）。原因。denn によって導入される主文は先行する主文の事柄に対する理由を述べる」とされ、da, weil に等しいとされる。ヘルビヒ・ブッシヤ『現代ドイツ文法』、在間進訳、三修社、二〇〇一年、五二二頁参照。
- (17) ヘルビヒとブッシヤによれば、denn には、「客観的現象の原因を表わすものと、認識的判断の根拠を表わすものがある」とされる。前掲邦訳、六九六頁参照。
- (18) Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm, 16 Bde. [in 32 Teilbänden], Leipzig: S. Hirzel 1854-1960. Nachdr. München: Deutscher Taschenbuch. 以下、この辞書を参照するところには、本文中でGRIMMと略し巻数と欄数を付記する。とりわけ、『独和大辞典』も、denn の補注として「もと dann と同義で、意味が分かれたのは十八世紀以来であるが、方言では今日でも混用されることがある」としている。
- (19) 掲出ラテン語の英語の意味は、Cf. Lewis and Short, A Latin Dictionary, Oxford 1879. ただし、nam enim のところは、本文において後述。以下、この辞書を参照するところには、本文中にLEWISと略し頁数を付記する。
- (20) Johann Christoph Adelung, Grammatisch-kritisches Wörterbuch der Hochdeutschen Mundart, mit beständiger Vergleichung der übrigen Mundarten, besonders aber der Oberdeutschen, Wien 1811. 以下、この辞書を参照するところには、本文中にADELUNGと略し巻数と欄数を付記する。この辞書を参照するにあたって、Bayerische Staatsbibliothek の次の WEB サイトを利用した。http://mdz.bib-bvb.de/digbib/lexika/adelung/ (二〇〇六年一月現在)
- (21) このことは、電子テキストの検索によっても確認できよう。

(22) ただし、パウアーによれば、アーデルンクやその他の最良の文法家は認めないとしても、「正確な物書きをする著作者の良き言語使用によれば、今ではまったく明確に安定して denn は dann と区別されている」とする。Vgl. Heinrich Bauer, *Vollständige Grammatik der neuhochdeutschen Sprache*, 4. Bd., Berlin 1832, S. 309. (以下、本書を参照する際には、本文中にBAUERと略し巻数とページ数を付記する。) いわゆる書き言葉では、当時においても、並列接続詞として denn の代わりに dann を用いることが廃れていたというところだろう。

(23) なお、参考までに、他の項目を列挙しておく。

「二」同様に今では、比較での否定や比較級での否定の後、nichts, nichts anders の後では、たんに denn が置かれるが、これは、どの場合でも使われるわけではなく、その代わりに als と言ふことが好まれる。dann 7 d 参照。dann 7 d の説明では、「quam, nisi」として用いられるもの。

「三」接続法の後でも、nisi の場合に denn が通用する。dann 7 c と比較せよ。dann 7 c では、「疑問の場合の強調」とある。

「四」tunc の意味では、dann が断然支配的であるものの、denn もときおり用いられる。しかし、これは現代ではまったく消え去った。ゲーテの場合、初期の著作ではなお用いられているが、後にはこれを斥けている。レッシングは、dann と言ふが、alsdann のほかに alsdenn とも言ふし、ゲレルトも alsdenn と言ふ。dann 一と比較せよ。dann 一では、「出来事が生じた後、ある条件が実現した後の時点を示し、tum, tunc と同じ事態である。alsdann, alsdenn の形で強調される。その際、wenn が前提とされるが、つねに表現されるわけではない」とある。

「五」zugleich, dabei, dazu, simul として。dann 四、五と比較せよ。dann 四では、「出来事の結果や順序、秩序に関係し、したがって danach, sodann, deinde と同様に」dann 五では、「出来事の際に時間を考慮できず、したがって dann は、zugleich, auch, überdies, dazu, simul と同じである」とある。

「六」mitin, also として。文の内部に位置するこの不変化詞は、この場合、たいていの場合たんに前提されるだけの、あるいはたんに一般的に暗示されるだけの理由しかない推論を示す。tum の意味が背後にあるのだから、この場合、本来は dann が通用すべきところである。(出典中略) dann 7 b を参照せよ。dann 7 b では、「文のはじめに位置せず、したがって、mitin, demnach, also と同じであり、それゆえたんなる強調の働きが弱いことがある。その根拠は、一般的に与えられたり前提とされたりすることが珍しくない」とある。

「七」疑問の場合、理由との関係がかなり一般的であり、この不変化詞は、疑問の緊要性を示すために働く。この場合も、tum を指示するので dann を用いるのがよりましであった。レッシングがとくに頻繁に使用し、ゲーテはほんのわずかしが使用しない。

(24) なお、参考までに、他の項目を列挙しておく。

「二」先行する文から一般的に隠された推論を示す。この場合には、denn は、so と結びつき、定動詞と人称代名詞の後に位置する。

「三」条件を示す。「この場合、denn は、確かに接続法と結びつくが、これを支配するのではなく、事柄そのものの不確定な性状がこの語を要求する。この場合、また、主格、定動詞が前に来て、またときおり人称代名詞の語尾が前に来る」。

「四」主語を厳密に規定する限定を示す。否定表現の後にあり、als と同じ」。

「五」比較を示す。ただし、もっぱら比較級の後にあり、als と同様である」。

「六」副詞の形態で、時間的継起を示す。「高地ドイツ語では、この意味では dann がより一般的である」。

(25) 項目としては、「C」接続詞 nam は、ときおり語または節に続く」というものもあるが、本論では考慮不要である。

(26) バウアーは、アーデルンクの Grund の項目のうち第三の「へものごと」の
 依拠する平面や物体」のうち狭義のものの一「比喩的に、理解できるもの
 や真理、さらに事柄の定在が依拠するすべて」を取り上げている。つまり、
 ここで示されるのは、アーデルンクの Grund の意味のすべてではない。な
 お、その引用は、若干の省略を含む。以下同様。

(27) バウアーは、アーデルンクの Ursache の項目のうち第二の「なにかあり、
 あるいは生ずることのわけ」の一部を取り上げている。

(28) ヘルビヒ・ブッシュヤ、前掲邦訳、六九六頁参照。

(29) ハラルト・ヴァインリヒ『テキストからみたドイツ語文法』、脇坂豊編訳、
 三修社、二〇〇三年、七五六頁。

(30) テキストは、ズーアカンプ社版全集のものとし、検索の便宜を図って
 「ページ数・行数」で引用範囲を、「キッコ」で当初からの段落番号と当
 該段落での文番号を記す。文脈の流れを観るうえで必要十分なテキストを
 示すことが望ましいが、紙数に限りがあるので、denn の前後に限って引用
 する。なお、引用したテキストには翻訳を付し、denn の箇所は、原文につ
 いてはポールドで、訳文についてはゴチックで表記する。原文のイタリック
 は、そのまま表現してある。解釈で言及する箇所については、参照の便を
 図って、下線を付しておく。

(31) ヘーゲル『精神の現象学』上・下、金子武蔵訳、岩波書店、二〇〇二年。
 以下、「金子」と略し、頁数を本文中に記す。

(32) これは、従属接続詞 weil との大きな違いの一つである。「並列接続詞
 denn は二つの主文を結び合わせて、そのうちの二番目の denn 文が一番目
 の文を理由づけるのに対して、従属接続詞 weil は因由の副文を導入して、
 その副文が主文に直接従属することも目的語文に従属することもできるので
 ある」。E・ヘンチェル／H・ヴァイト『ハンドブック 現代ドイツ文法の解

説』第三版、西本美彦他訳、同学社、二七二頁。
 (33) 榎山欽四郎の訳は、denn を「なぜなら」とし、七四④のみで「から」と
 結ぶから、金子以上に不適切である。『世界の大思想一 ヘーゲル 精神現

象学』九版、榎山欽四郎訳、河出書房新社、一九八〇年、五七頁参照。長谷
 川宏の訳は、denn を「というのも」とし、結びは榎山と同様。ヘーゲル
 『精神現象学』、長谷川宏訳、作品社、一九九八年、五一頁参照。牧野紀之
 の訳は、denn を「というの」とし、結びは金子と同様。G・W・F・ヘーゲ
 ル『精神現象学』、牧野紀之訳、未知谷、二〇〇一年、一六六頁参照。なお、
 以下、これらの邦訳の参照については、頁数のみを記す。

(34) Zeigen müssen wir es uns lassen. は、zeigen を強調するために文の第一
 文肢に躍り出たものである。この文は、一〇五①の言明をなぞっている。通
 常の表現では、Wir müssen es [= das Jetzt 四格] uns zeigen lassen となる。
 一〇五①でもそうだが、uns は三格または四格であるから、j.m. et4 zeigen
 の用法に従えば、Eus を三格にとつて、zeigen の意味上の主語となる四格
 の目的語が省略されているとみて、当該の文は、「我々は〔我々をして〕
 〈今〉を我々に指し示めしむる」と理解することになる。Eus を四格にとつ
 た場合は、これが zeigen の意味上の主語になるから、示す相手が不明にな
 るが、これは文脈上「我々」以外にない。

(35) 榎山は、denn を「なぜなら」とする(七二)。長谷川も、金子と同様、
 「から」で結ぶ(七二)。牧野は、この文を、「言葉で説明する」との対比で
 「示す」(Zeigen)理由づけとして捉える(二二二)。

(36) 「注意すべきことは、denn-付加部は、目立つ理由を引き合いに出す限り
 において、しばしば比較的詳細な理由づけをすることである。この場
 合ドイツ語の句読法の規則は、基礎部と付加部をセミコロンので分けることを
 要求する。きわめて詳細な理由づけの場合、denn-付加部は統語論的に自立
 しても現れる(句読法としてはピリオドの後)(強調点は我々)。ヴァイン
 リヒ、前掲箇所。このことは、解釈例第一についても、考慮に入れられるべ
 きである。

(37) 榎山は、「なぜならから」と訳す(七九)。牧野は、「から」と訳す
 (二三四)。長谷川は、denn に対しその語義から到底理解できないようなで
 たらぬ訳——あたかも denn が関係代名詞であるかのような訳——を与え

ているから、その訳は参照に値しない(八三)。

- (38) 檜山の訳も同様(一〇二)。長谷川は、dennの作用域を第二のセミコロンのまどと捉える(一一一)。牧野は、dennを「すなわち」と訳す(二九八)。
- (39) 金子をはじめ、諸訳は、この文の冒頭のEs istを「存在」と捉えているか、Esを形式主語と捉えて、ein Selbstbewusstseinを真の主語と考えている(金子一八二、檜山一一五、長谷川一二七、牧野三二九)。しかし、冒頭のEsも、次の文一七七②のesも、前段落末尾の文一七六⑥のLebendiges Selbstbewusstseinでなければならぬと思う。というのも、ein Selbstbewusstsein für ein Selbstbewusstseinと記されるさいの二つの自己意識は、同一水準のものではなく、「個」の水準のものと「類」の水準のものが語られているからである。こう考えなければならぬのは、前段落末尾で自己意識の対象が「類」すなわち「生命ある自己意識」とされ、一七七①がこれを継承し、さらに次の文一七七②で自己意識の「統一」や「普遍的な実体」が指摘される論脈を繋ぐとするとき、「類」の水準の自己意識を念頭に置く必要に迫られるからである。このような論脈を破壊しないためには、同水準のein Selbstbewusstseinが対峙しあっているとみるのではなく、一方のein Selbstbewusstseinは、lebendiges Selbstbewusstseinと規定される必要があり、事実、Es istのEsがこれを指示しているわけである。
- (40) 檜山は、「とらうのも」と訳す(一一五)。牧野も同様(三二九)。長谷川は、dennを「ので」と訳し、主文の帰結と捉える(一二七)。帰結ではないだろうが、原因と捉えるよりは評価しうる。
- (41) 檜山は、「からこそ」と訳し、論理の逆転を積極的に捉えているかのようである(一一五)。長谷川は、「から」と訳す(二二八)。牧野は、「というのへから」と訳す(三二九)。
- (42) 檜山の訳も同様(一四四)。牧野は、「というのへから」と訳す(三九九)。長谷川のは、dennを訳さない分、通用性がある(一六四)。
- (43) sieの指示対象は、dennの性格上、主文にあるとみられるので、主語のWirklichkeitか述語のFormかのいずれかである。同一性を主張する命題な

ので、どちらを選択しても大差ないともみられるかもしれないが、denn文が二式の仮定性を保つには、esにある程度の条件性を認めなければならぬ。その際、どちらが適切であるかを考えると、「知られていないもの」を説明できるものでなければならぬと考え、本文のように訳す。

- (44) 檜山によれば、「対象的现实は、知られていないものであるから」、「対象的现实、存在は、まったく自己のない形式である」ということになる(三四二以下)。「知られていないもの」は「自己のない形式」に値するかもしれないが、ここで「知られていないもの」は、反実であるから、こうした判断自体が成立しない。

- (45) 檜山については前註参照。長谷川は、denn文の二式を無視している(四〇六)。牧野は、金子と同様「そうでないとしたら」と竄入する(七九三)。